

令和 8 年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第 6 号（10 月予報）

令和 8 年 9 月 29 日 秋 田 県 病 害 虫 防 除 所

◇今回の予報対象期間は10月を主とします。次回の発表は令和 9 年 3 月 17 日の予定です。

◇病害虫発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇秋田県では「秋田県総合防除計画」を策定し、化学農薬のみに依存しない総合防除を推進しています。病害虫を防除する場合は、本計画を参照し総合防除に取り組んでください。本計画は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。
<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病害虫防除所
トップページ

I. 予報の要点

小 麦	雪腐病の感染量は少ないと予想されますが、ほ場の排水対策を徹底するとともに、今年の春季に発生が多かったほ場では、根雪直前に薬剤散布をしてください。
野 菜	病害では、ねぎ（秋冬どり）の黒斑病・葉枯病の発生量がやや多いと予想されます。防除対策情報第 9 号を参照して防除を徹底してください。 虫害では、ねぎ（秋冬どり）のアザミウマ類とネギハモグリバエ、キャベツ（秋冬どり）のモンシロチョウの発生量が多いと予想されます。発生状況を確認し、防除を徹底してください。
な し	紅粒がんしゅ病の発生量がやや多いと予想されます。病枝、病患部は削りにとって焼却し、削り取りの跡、傷口、剪定跡に薬剤を塗布して感染を防止してください。

Ⅱ．主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
小 麦	雪腐病	県中央部	—	—	少ない
		県南部			少ない
ねぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	べと病	全県	—	平年並	平年並
	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや多い	やや多い
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	やや多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや多い	多い
	シロイチモジヨトウ	全県	—	平年並	平年並
キャベツ (秋冬どり)	黒腐病	全県	—	平年並	平年並
	コナガ	全県	—	平年並	やや多い
	モンシロチョウ	全県	—	やや多い	多い
	ヨトウガ (第2世代)	全県	—	やや少ない	やや少ない
な し	紅粒がんしゅ病	県北部・県中央部	—	—	やや多い
	胴枯病	県北部・県中央部	—	—	やや少ない

Ⅲ．発生予報と防除対策

A 小麦

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1 雪腐病	—	県中央部：少ない (前年よりやや少ない) 県南部：少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア 東北地方寒候期予報によると12～2月の降雪量は少ないと予報されている（ /ー）。

イ 3月の巡回調査における葉腐れ・枯死面積率は県中央部が0%（平年0.3%）でやや低く（ /ー）、県南部が0%（平年27.3%）で低かった（ /ー）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 早播、窒素肥料の多用、リン酸肥料の不足時に発生が多くなるので、適期の播種や適正な肥培管理に努める。

イ 水田転作での栽培は、排水対策を徹底する。

ウ 県内では雪腐小粒菌核病の発生が主体である。今年の春季に発生が多かったほ場では、根雪（平年の初日は秋田市が12月5半旬、横手市が12月3半旬）直前にシルバキュアフロアブル、バシタック水和剤75、フロンサイドSC、モンカット水和剤のいずれかを1回散布する。なお、無人航空機で防除を行う場合は、根雪直前にシルバキュアフロアブルを散布する。

エ 薬剤散布後、根雪までの期間が長かったり、多量の降雨があった場合は、再散布を行う。ただし、シルバキュアフロアブルの根雪前の使用回数は1回なので注意する。

オ 根雪期間が100日を超えると被害が著しくなるので、特に根雪期間が長い県南部では、根雪直前の防除に努める。

B ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 さび病	—	やや少ない (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 9月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年2.5%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発病が多くなってからでは防除効果が劣るので、発病初期からアミスター20フロアブル（RACコード：11）、オンリーワンフロアブル（同：3）、カナメフロアブル（同：7）などを散布する。薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。
- イ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが3、7、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 べと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 9月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早いので、定期的にジマンダイセン水和剤などを散布し、予防に努める。
- イ 発病が見られたらオロンディスウルトラSC（RACコード：40・49）、ザンプロDMフロアブル（同：40・45）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などを散布する。薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、RACコードが4、11、27、40、45、49の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 黒斑病・葉枯病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 9月4半旬の巡回調査における発病株率は16.6%（平年10.8%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 9月7日発表の防除対策情報第9号を参照して、防除を徹底する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 9月4半旬の巡回調査における食害株率は64.5% (平年52.6%) でやや高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤 (RACコード: 3A)、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤 (同: 4A)、グレーシア乳剤 (同: 30)、ダントツ水溶剤 (同: 4A)、ディアナSC (同: 5)、アベンジャーフロアブル/ファインセーブフロアブル (同: 34)、ベネビアOD (同: 28)などを散布する。薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ネギハモグリバエ	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 9月4半旬の巡回調査における食害株率は13.7% (平年9.7%) でやや高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤 (RACコード: 3A)、グレーシア乳剤 (同: 30)、ダブルシューターSE (同: 5・未)、ダントツ水溶剤 (同: 4A)、ディアナSC (同: 5)、ベネビアOD (同: 28)などを散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統 (バイオタイプB) の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シロイチモジヨトウ	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 9月4半旬の巡回調査における食害株率は1.5% (平年3.5%) で平年並だった (/±)。

ウ 防除適期決定ほ (2地点) のフェロモントラップにおける9月1～4半旬の総誘殺数は242頭 (平年2213.8頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が作物内に食入したり、幼虫の齢期が進むと防除効果が劣るので、発生初期 (若齢期) にアグロスリン乳剤 (RACコード: 3A)、グレーシア乳剤 (同: 30)、ゼンターリ顆粒水和剤 (同: 11A)、ディアナSC (同: 5)、ノーモルト乳剤 (同: 15)、ベネビアOD

(同：28)、ヨーバルフロアブル(同：28)などを散布する。薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。

- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。また、薬剤への感受性の低下が疑われた場合は、感受性低下が疑われる薬剤を本害虫を対象とした防除薬剤として使用しない。

C キャベツ(秋冬どり)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒腐病	—	平年並(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。
 イ 9月4半旬の巡回調査における発病株率は0%(平年0%)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害部分から病原菌が侵入するため、防除を徹底する。
 イ 銅水和剤(ヨネポン水和剤、Zボルドー、カスミンボルドー/銅シン水和剤)などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 コナガ	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている(/+)。
 イ 9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.1頭(平年0.1頭)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発生が多い場合は、グレーシア乳剤(RACコード：30)、ブロフレアSC(同：30)、アフーム乳剤(同：6)、ディアナSC(同：5)、フェニックス顆粒水和剤(同：28)、プレバソンフロアブル5(同：28)などを散布する。薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。なお、グレーシア乳剤、ブロフレアSC、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるので、防除回数を減らすことができる。
 イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。
 ウ 薬剤は葉裏に十分付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 モンシロチョウ	—	多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている(/+)。

イ 9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.1頭（平年0.0頭）でやや多かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除が可能である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ヨトウガ （第2世代）	—	やや少ない （前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 6月4半旬のキャベツ（初夏どり）の巡回調査における第1世代の発生量は平年並だった（ /±）。

ウ 9月4半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.1頭）でやや少なかった（ /－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除が可能である。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

D なし

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 紅粒がんしゅ病	—	やや多い（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 4月の巡回調査における発病枝率から、伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

ウ 4～5月の降水量から、感染量はやや多かったと推定される（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 病枝、病患部は削り取って焼却するなどして適切に処分する。

イ 樹勢の低下は発生を多くするので栽培管理を適正に行う。

ウ 凍害部からの発病が多いので凍害防止に努める。

エ 削り取りの跡、傷口、剪定跡にトップジンMペーストの原液を塗布して感染を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 胴枯病	—	やや少ない（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 4月の巡回調査における発病枝率から、伝染源量はやや少ないと推定される（ /－）。

ウ 5～8月の降水量から、感染量は平年並と推定される（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 1 紅粒がんしゅ病のア、イ、ウに準じる。

イ 削り取りの跡、傷口、剪定跡にトップジンMペースト又はバッチレートの原液を塗布して感染を防止する。

IV. 気象予報

令和8年9月24日仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報（9月26日～10月25日）

（1）予報のポイント

- ・ 向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	30%	60%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	30%	40%	30%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

	低い	平年並	高い
9/26～10/2（1週目）	10%	20%	70%
10/3～10/9（2週目）	30%	50%	20%
10/10～10/23（3～4週目）	20%	30%	50%

令和8年9月18日仙台管区気象台発表 東北地方寒候期予報（12月～2月）

（1）予報のポイント

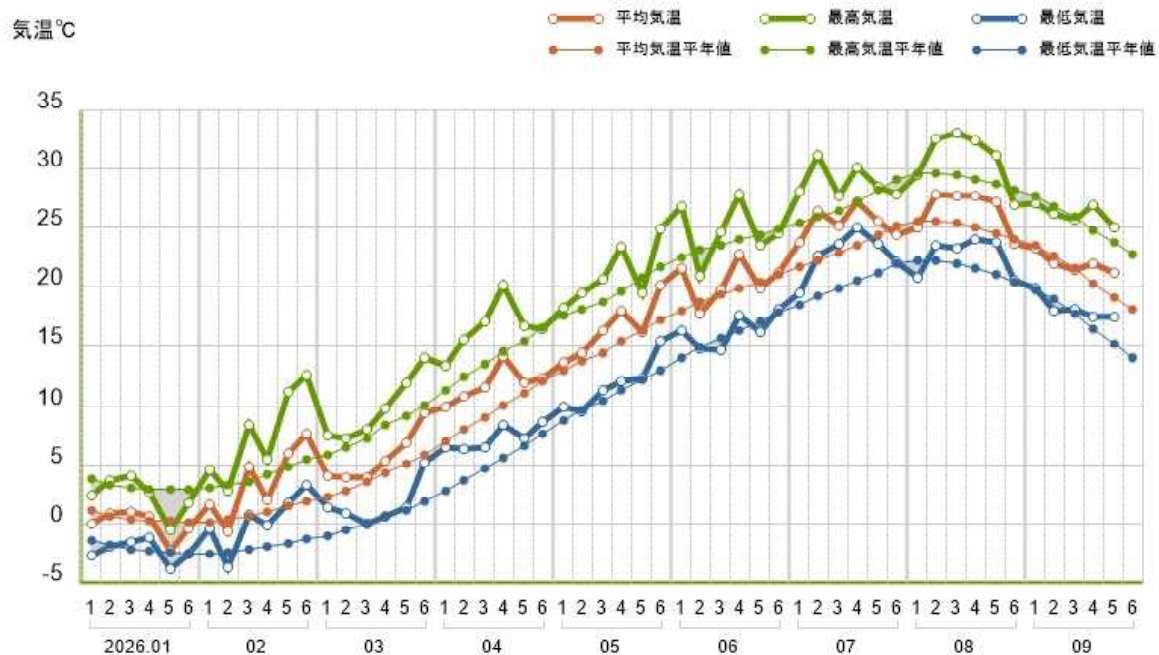
- ・ 寒気の影響が小さいため、冬の気温は高いでしょう。
- ・ 東北日本海側では、降雪量は少ないでしょう。

（2）冬（12月～2月）の気温、降水量、降雪量の各階級の確率（東北日本海側）

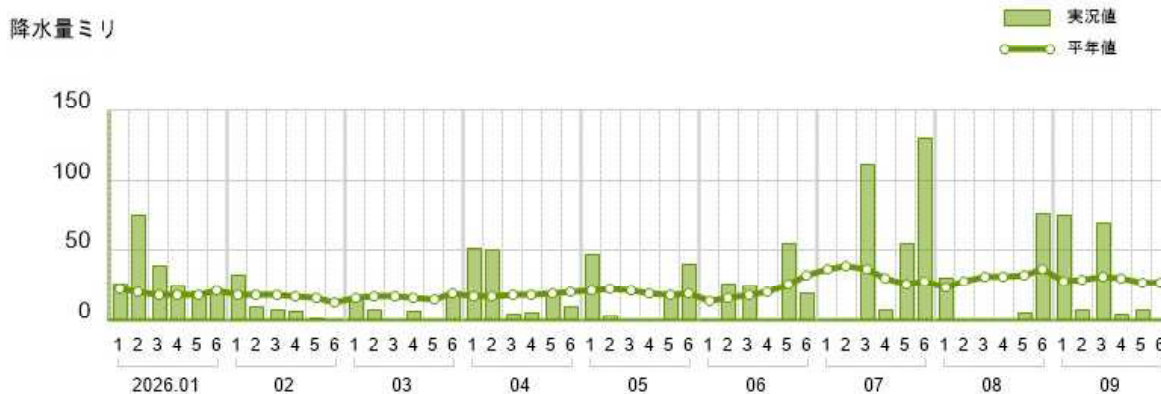
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	30%	50%
降水量	30%	30%	40%
降雪量	50%	30%	20%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～9月5半旬 秋田県農業気象システムより)

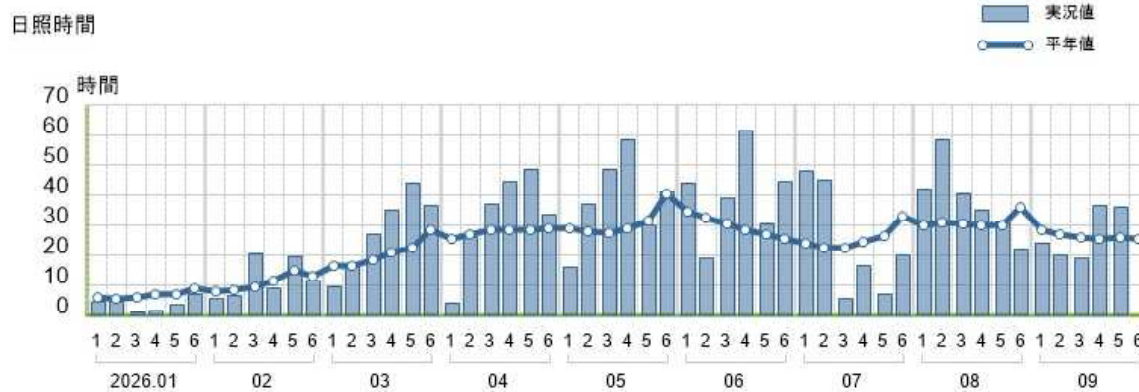
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

		平年値					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%	
評価	少ない	やや少ない	平年並			やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○ 安全使用の基本事項

- ・ 農薬の使用基準を遵守する。
- ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・ 防除履歴を必ず記録する。

○ 農薬使用上の注意

- ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
- ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
- ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。

○ 農薬取扱い上の注意

- ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移しかえて保管しない。また、食品と一緒に保管しない。

問合せ先

秋田県病虫害防除所 TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224
かづの果樹センター TEL 0186-25-3231
天王分場チーム TEL 018-878-2251